

## 樹齢300年の松林と地域住民 ——宮崎シーガイア開発をめぐる——

杉野華淑

1987年6月総合保養地域整備法（リゾート法）が成立した。その第1陣として指定を受けた宮崎市であったが、その背景に松林が深く関わっていた。森林法・保安林に関する規制緩和とヒューマングリーン・プランにより宮崎市の松林をリゾート施設建設のために利用できたのである。更に、観光宮崎復活を願う地元企業や、地域住民の思いも、開発を後押しした。

こうして、長い歴史を持つ松林約10万本が伐採されリゾート施設が建設された。これに対し地域住民らが、松林の①防災上の役割、②歴史的価値、③地域交流の場としての価値、④自然景観上の価値等を訴え反対運動を起こす。そして、国、県、第三セクターのフェニックスリゾート（株）を相手取り訴訟を起こす事になる。

また、地域住民への聴き取り調査では、以前は松林の中でとれるきのこ類を好んで食していた事、松葉を家庭の燃料や、たばこのたい肥に用いていた事が語られた。この様な話から松林と人間が深く関わっており、生活の一部になっていた状況を知る事ができた。

そして、松林再生を目指したボランティア活動をする住民へも聞き取り調査を行なった。松林がだんだんと荒れてきたのは、生活や意識の変化などにより人々が松林の中に入る事がなくなった事がその原因であろうと彼らは語っていた。そして、昔の美しい松林をよみがえらせるべく活動を始めた。それには長い年月を必要と

するため、地域の子供たちにこの活動に参加してもらった。

今回の調査で私が感じたのは以下のような事である。人々は宮崎市の松林に対してそれぞれの立場から、それぞれ異なる認識を持っており、時代とともにその認識も大きく変わってきている。しかし、それはシーガイアに伴う開発だけが原因ではなく、人間がより便利なものを求め、発展させ、変化させてきたことが原因の一つなのではないか。またこの松林は、もともと人為的に造成されたものであり、それを維持するためには、人間の手による管理が必要であり、自然と人間の関わりが必要であり、以前はそれが行われていた。だからこそ生活の場として地域交流が根つき、松も美しく保たれていた。そのうち、人間の生活習慣も、嗜好も変わり、自然と人間の関わり、営みが薄れてきた。

このリゾート開発やそれに伴う反対運動は、自然との関わりを忘れかけていた人間にもう一度自然に目を向けさせるきっかけとなった。そして、生活と身近なところにある松林を地域のつながりの力で再生させようという活動が始まった。子供たちとともに行なわれたこの活動は、単に松の苗を植えて、育てようというだけではない。人間が忘れかけていた、自然と人間の関わりを再び育てようとする活動なのではないだろうか。

## 後期高齢者の日常生活行動 ——板橋区「いきいき教室」参加者の事例——

鈴木千代

高齢社会、長寿社会においては、健康な時期の伸長とともに体が弱ってから過ごす時間も増える、と考えられる。身体的・精神的な限界が

ら、自力で自分の意志の通りに動きにくくなった時の日常生活を明らかにし、高齢になり日常生活に支障をきたした時の福祉サービスの効用